

Vol.

1

2026

Aug

Newsletter

肥満と消化器疾患研究会

The Japan Society of
Obesity and Digestive Disease



TOPICS

顧問 坂井田 功先生 追悼

寺井 崇二 先生
新潟大学

当番会長挨拶

内藤 剛 先生
北里大学

主題 1 要旨

三宅 映己 先生
愛媛大学

主題 2 要旨

内藤 剛 先生
北里大学

主題 3 要旨

川口 巧 先生
久留米大学



次回研究会のご案内

第 17 回肥満と消化器疾患研究会

2027 年 5 月 5 日 (水) 札幌

当番会長：正宗 淳 先生

(東北大学大学院医学系研究科消化器病態学分野)



肥満と消化器疾患研究会

坂井田 功先生を偲んで



寺井 崇二(新潟大学大学院医歯保健学研究科消化器内科学分野教授)

2026年3月20日、坂井田 功先生が享年 70 歳でご逝去されました。突然の訃報に接し、深い悲しみとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

私が 1990 年に山口大学医学部第一内科へ入局した当時、坂井田先生は米国留学から帰国されたばかりで、私にとって最初のオープンでした。膵癌をはじめとする消化器疾患や急性肝不全症例をご指導いただき、臨床医としての基本を一つひとつ教えていただきました。

坂井田先生は、何よりも基礎研究を愛する医師・研究者でした。留学から帰国された当時は、Ca および活性酸素(ラジカル)研究について熱く語られ、その探究心に強く惹かれたことを今でも鮮明に覚えています。その後も、急性肝不全、肝線維化、肝発癌、鉄代謝、肝再生、さらには肥満・代謝性肝疾患へと研究を発展させ、常に新しい医学を切り拓いてこられました。今振り返ると、先生の研究は一貫して肝臓・消化器疾患の病態解明と生体の恒常性維持・回復のメカニズムを探究するものであり、現在私が目指している「恒常性回復学」の原点も、坂井田先生から学んだ研究哲学にあると感じています。

大学院時代には、研究だけでなく、診療や人生の節目においても、いつも私を支え、温かく見守り、ご指導くださいました。医学・研究のみならず、人との接し方、組織のあり方、そして医師・研究者としてどのように生きべきかという「人間学」を、先生から数多く学ばせていただきました。私が研究者として今日まで歩むことができたのは、先生の惜しみないご支援と温かい励ましがあったからこそです。

先生のライフワークの一つであった鉄代謝・鉄キレート療法の研究では、私もともに研究に携わり、肝細胞癌に対する鉄キレート療法の臨床研究を The New England Journal of Medicine に発表することができました。また、山口大学では自己骨髄細胞投与療法の開発をともに進め、肝再生医療の新たな道を切り拓くことができました。さらに、肥満・代謝研究においても、胃内バルーン留置術導入を目指した Team Mets の立ち上げや、メダカ MASH モデルの構築など、新たな挑戦を常に後押ししてくださいました。先生は若手の新しい発想を尊重し、挑戦する機会を与え、その可能性を信じて育ててくださる希有な研究者でした。

振り返れば、研究者としての私の原点は、まさに坂井田先生との日々にあります。現在、私が再生医療や肝再生研究を続け、日本肝臓学会、日本消化器病学会、日本再生医療学会などで活動できているのも、坂井田先生から受けた薫陶と、若い研究者の可能性を信じ、温かく支え続けてくださった先生が存在があったからこそです。坂井田先生との出会いがなければ、今の私はありません。

先生が残された研究への情熱、若手を育てる姿勢、そして人を信じ育てる教育者としての精神は、多くの弟子たちの中に確かに受け継がれています。肥満と消化器病研究会もまた、その理念を受け継ぐ大切な場であると感じています。私も先生から学んだ「患者さんのために新しい医学を創る」という信念を胸に、恒常性回復学をはじめ、肝臓学、肥満・代謝学、再生医療のさらなる発展と次世代の育成に微力ながら尽くしてまいります。それが、先生への何よりの恩返しであると信じています。

坂井田先生、長年にわたり温かくご指導いただき、本当にありがとうございました。心から感謝申し上げますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

第 16 回肥満と消化器疾患研究会 開催報告

当番世話人

内藤 剛(北里大学医学部下部消化管外科学主任教授)



2026 年 4 月 15 日(水)、石川県金沢市の「TKP ガーデンシティ PREMIUM 金沢駅西口」において、第 16 回肥満と消化器疾患研究会を当番世話人として開催させていただきました。本研究会は、肥満に関連する消化器疾患の病態解明と予防・診断・治療の発展を目指して 2011 年に日本消化器病学会の附置研究会として発足し、現在は関連研究会に移行いたしました。

今回のメインテーマには「ストップ、メタボリックドミノ！」を掲げました。肥満は2型糖尿病や脂質異常症、さらには悪性疾患や内分泌異常、整形外科疾患など多くの疾患の起点となることから、当時慶應義塾大学の腎臓内分泌代謝内科教授の伊藤裕先生が2003年に「メタボリックドミノ」という概念を提唱されました。その後我が国でメタボリックシンドロームという概念が定着したのはご存知の通りかと思います。

欧米人に比してわが国の肥満者の人口は決して多いとは言えません。しかし日本人は欧米人種に比較して内臓脂肪型肥満が多く、低い BMI でも2型糖尿病などの罹患率が高く、メタボリックシンドロームに陥るリスクが高いことが知られています。そのため、肥満から連鎖する「負のドミノ」をいかに食い止めるかは我が国の医療における喫緊の課題です。今回の研究会ではいかにこのドミノを食い止めるかを、様々な角度から議論したいと考えました。

肥満に関連する消化器疾患としては脂肪性肝疾患が代表的ですが、その他にも GERD や膵疾患さらに

は大腸癌などとの関連も示されており、これらの診療における課題はまだ多く残されています。また肥満症に対する治療法に関しても、私が専門としている減量・代謝改善手術に関しては、その概要や効果発現機序などあまり一般に理解されていない面も多く、肥満症診療で常に問題となる「スティグマ」に繋がっていると感じていました。

そこで今回の学術プログラムでは、「糖代謝異常と消化器疾患」「減量・代謝改善手術と消化器疾患」「脂肪性肝疾患に対する治療戦略とその課題」を主題とした3つのセッションを柱とし、消化器疾患のみならず様々な角度から肥満症の課題に関して議論を深めました。共催セミナーにおいては腸内環境と糖代謝・肥満に関する研究のご講演、さらには近年急速に普及しているインクレチン製剤による肥満症治療のご講演をいただき大変勉強になりました。また昨今の働き方改革に寄与する AI アバターを活用した患者説明支援システムの紹介も大変好評でした。一般演題においても独創的で有意義な研究の発表を多くいただき活発な議論をさせていただきました。

昨今このような小さな研究会を主催することが大変難しくなっている中で、教室員をはじめ多くのご協力をいただき、貴重な時間を共有して学べる機会をいただき、大変感謝しております。本研究会の重要性は今後ますます大きくなっていくものと思っています。今後のますますの発展を祈念して参りたいと思います。

主題 1「糖代謝異常と消化器疾患」を担当して

三宅 映己(愛媛大学大学院医学系研究科 地域生活習慣病・内分泌学講座)

正宗 淳(東北大学大学院医学系研究科 消化器病態学分野)

第 16 回肥満と消化器疾患研究会では、「ストップ、メタボリックドミノ！」を全体テーマとして、肥満・代謝異常を起点とした消化器疾患の病態と診療上の課題が幅広く議論されました。主題 1「糖代謝異常と消化器疾患」のセッションでは、糖尿病および糖代謝異常が、上部消化管、膵、肝胆膵領域の疾患発症や進展、治療後経過にどのように関与するかについて、5 題の発表をもとに活発な議論が行われました。前半では、胃食道逆流症(GERD)と代謝異常との関連が取り上げられました。健診内視鏡例を対象とした検討では、内視鏡的 GERD の重症度と BMI、腹囲、血圧、脂質代謝指標などが密接に関連し、肥満例に限らず代謝関連因子が GERD の病態を強く反映し得ることが示されました。また、糖尿病患者ではびらん性食道炎の頻度が 19.3%と非糖尿病患者(12.4%)に比して有意に高く、腹囲、男性、BMI 高値とともに糖尿病そのものが重要な危険因子となる可能性が報告されました。GERD は日常診療で極めて頻度の高い疾患ですが、症状や酸逆流のみならず、全身の代謝状態を含めて包括的に評価する重要性を再認識する内容でした。

続いて、糖尿病と膵癌の関連について、大規模データに基づく検討が提示されました。糖尿病は膵癌のリスク因子である一方、新規発症あるいは増悪が膵癌発見の契機となることがあります。膵癌側(2,291 例)と糖尿病側(114,371 例)の双方からなる国内の大規模データベースを解析する試みは、膵癌早期診断に向けた実臨床上の具体的な着眼点を明らかにするうえで大きな意義を有すると感じました。

後半では、脂肪性肝疾患(SLD)および MASLD を中心に、糖尿病や血糖コントロールが肝疾患の予後・病理像に及ぼす影響が議論されました。SLD 合併肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法(RFA)後の成績では、糖尿病合併により全無再発期間が平均 731 日(約 2 年)、生存期間が平均 286 日も有意に短縮するという、実臨床において見過ごせないデータが示されました。また、肝生検で診断された MASLD 症例の検討では、HbA1c 5.5%以上の軽度上昇であっても疾患活動性(NAS 高値)と有意に関連し、特に HbA1c 6.5~7.4%の群では進行線維化(ステージ 3-4)の独立した関連因子となることが示唆されました。血糖管理を単なる併存症管理としてではなく、肝疾患の進展抑制や治療後管理のパラダイムそのものとして捉える必要性を強く感じさせる発表でした。

本セッションを通じて、糖代謝異常は個々の消化器疾患に付随する背景因子にとどまらず、発症、重症化、治療反応、予後を規定し得る重要な病態基盤であることが改めて明らかになりました。まさに「メタボリックドミノ」の一つひとつの連鎖を、消化器疾患の側からどのように捉え、どの段階で介入すべきかを考える貴重な機会となりました。消化器診療においては、臓器別の評価に加え、肥満、糖尿病、脂質異常、血糖変動といった全身性の代謝環境を統合的に捉える視点がますます求められます。各演者の先生方から示された知見は、今後の研究課題を広げるとともに、日常診療におけるリスク評価や介入のあり方を考えるうえでも大変示唆に富むものでした。

最後に、貴重なデータをご発表いただいた演者の先生方、活バツなご討論をいただいた参加者の皆様に深く感謝申し上げます。ならびに、本主題をご企画いただき、研究会の開催・運営にご尽力いただきました当番世話人の内藤 剛 先生(北里大学下部消化管外科学)をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

主題 2「減量・代謝改善手術と消化器疾患」

内藤 剛(北里大学医学部下部消化管外科学主任教授)

矢野 文章(東京慈恵会医科大学外科学講座)

セッション要旨

本セッションでは、高度肥満症および 2 型糖尿病に代表される代謝性疾患に対する外科的治療法である、「減量・代謝改善手術」の概要と消化器疾患に対する影響に関して 5 名の講師より解説していただきました。

まず最初に当番世話人の内藤より手術の方法や効果に関してさまざまな臨床研究をもとにしたエビデンス、さらには現在のガイドラインの状況を説明していただきました。また現在我が国で保険収載されている、腹腔鏡下スリーブ状胃切除術と、消化管バイパス術を伴ったスリーブ状胃切除術(スリーブバイパス術)の効果や適応の違いも概説いたしました。

続いて、この手術を我が国で最も多く行っている、四谷メディカルキューブの関 洋介先生より、スリーブ状胃切除術後に多く問題となる胃食道逆流症 (GERD) に関して、その発症機序、術前評価の重要性、術式選択の考え方や術後の GERD の対応戦略を説明いただきました。

続いて北里大学の小嶋慶太先生からはスリーブ状胃切除術後の難治性の GERD 症例に対する内視鏡的逆流防止粘膜切除術(ARMS)の試みが紹介されました。

また東北大学の井本博文先生からは、代謝機能障害関連脂肪性肝疾患(MASLD)に対する手術の効果とその発現機序に関する基礎的な研究成果、特に小腸バイパス術における胆汁酸の動態や腸内細菌環境との関連をご講演いただきました。

最後に岩手医科大学の佐々木章先生からは本手術の MASLD 改善のインパクトと将来展望をご講演いただきました。

主題 3. 脂肪性肝疾患(SLD)の治療戦略とその課題

～全身性代謝疾患としての SLD:基礎から移植までを見据えた包括的アプローチの最前線～

順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 教授 池嶋 健一
久留米大学医学部 内科学講座 消化器内科部門 川口 巧

はじめに

脂肪性肝疾患(SLD)は、日本人の約 30%が罹患しているだけでなく、肝硬変や肝臓、心血管疾患、様々ながんの発症に関わる重要な疾患です。先般開催された第 16 回肥満と消化器疾患研究会の主題 3「脂肪性肝疾患に対する治療戦略とその課題」では、基礎病態の最前線から内科的・外科的アプローチ、肝移植にいたるまで多角的な議論が交わされました。本稿では、同主題で交わされた活発な議論の要点を振り返り、SLD における包括的治療戦略の現状と、克服すべき今後の課題について概説します。

1. 基礎病態の解明と新たな治療標的

SLD の本態解明に向け、「腸肝連関」と「脂質過酸化」に着目した画期的な治療標的が発表されました。奈良県立医科大学の鍛冶孝祐先生らは、アルコール関連肝疾患(ALD)に対する PPAR α/δ アゴニスト elafibranor(EFN)の効果を報告されました。基礎的な研究により、EFN は肝脂質代謝を改善し炎症・線維化を抑制するだけでなく、腸管バリア機能障害を PPAR δ 依存的に保護し、腸肝連関を介して多面的に作用することが示されました。また、代謝機能障害関連脂肪性肝疾患(MASLD)の肝線維化において、金沢大学附属病院の柳昌宏先生らは脂質過酸化産物ヒドロキシノネナール(HNE)に着目して報告されました。マクロファージ集簇(HMA)への HNE 沈着が肝星細胞活性化と線維化進展を惹起すること、および ALDH2 アゴニストによる HNE 代謝促進が線維化を改善することを示し、新たな分子標的治療の可能性を提示されました。

2. 肥満症における臨床実態と癌治療への影響

MASLD の患者数は増加の一途を辿っており、従来の介入方法や癌治療における課題が浮き彫りとなっています。大阪労災病院の法水淳先生は、紹介受診された肥満症患者における MASLD 合併率が 97.1%に達する実態を報告されました。栄養指導のみによる介入の限界を指摘し、今後は GLP-1 受容体作動薬等を含めた積極的な薬物療法を組み合わせる包括的治療の必要性を強調されています。さらに、癌免疫療法に対する脂肪性肝疾患の影響についても報告がなされました。北里大学医学部の岩崎秀一郎先生らは、進行性肝細胞癌に対するアテゾリズマブ+ベバシズマブ療法において、MASLD 合併群が非合併群に比し予後が有意に短いことを発表されました。

無増悪生存期間(PFS 中央値:95 日 vs 413 日)および全生存期間(OS 中央値:385 日 vs 786 日)が大幅に短縮しており、背景にある脂肪性肝疾患が癌免疫療法の効果を左右する重要因子であることが明示されています。

3. 外科的アプローチ:肝移植の現状と代謝リスク管理

病態の最終段階である肝移植領域でも、SLD は深刻なジレンマをもたらしています。京都大学医学研究科の内田洋一朗先生らは、MASLD や ALD 背景の移植症例が急増する現状を報告されました。一方で、提供ドナー肝の約 40%に脂肪沈着を認めグラフト利用が困難である課題や、移植後 MASH 再発への糖尿病・myosteatosis(筋脂肪変性)の関与、術後の過食による早期脂肪肝化などの臨床課題を指摘されました。同講座の西尾太宏先生らは、MASLD 症例の移植後 5 年 SLD 発生率が 52%と高率であり、肥満と糖尿病の合併が有意に寄与することを示されました。移植後 SLD は心血管イベントに関連するため、遠隔期を見据えて周術期から包括的な代謝・心血管リスク管理を導入する重要性を提唱されました。

おわりに

本セッションを通じ、初期病態から癌治療および肝移植にいたるすべてのステージにおいて、「心血管代謝リスク因子」の制御が共通の最重要課題であることが再認識されました。肝臓という単一臓器にとどまらず、全身性代謝疾患としてシームレスにアプローチする包括的 SLD 治療戦略の構築に向け、本研究会は非常に有意義な道標を示したと考えます。素晴らしい発表を行った演者の先生方、ならびに参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

第17回肥満と消化器疾患研究会のお知らせ



テーマ：「肥満消化器病学の深化」

当番世話人： 正宗 淳
東北大学大学院医学系研究科
消化器病態学分野

日程：2027年5月5日(水)

会場：TKP 札幌駅カンファレンスセンター
〒060-0807
北海道札幌市北区北7条西2丁目9
ベルヴュオフィス札幌



学会事務局

東北大学大学院医学系研究科消化器病態学分野

〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1
TEL:022-717-7171 FAX:022-717-7177
E-mail:17odd@g-mail.tohoku-university.jp

運営事務局

株式会社東北共立

宮城県仙台市太白区八本松2-10-11
TEL:022-246-2591 FAX:022-399-7749
E-mail:17odd@tohoku-kyoritz.co.jp

編集部

編集長：池嶋 健一（順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 教授）
編集委員長：今 一義（順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学 先任准教授）
事務局：順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学内
肥満と消化器疾患研究会事務局
TEL：03-3813-3111(内線:3609)
FAX：03-3813-8862
E-mail：jsodd@juntendo.ac.jp

